

同〔八月一四日〕

一、同刻〔四時過〕西村や与八来ル。予対面、右ハ合巻稿本催促也。木の葉小せん餅みやけとして持参。尚又たね彦方へも罷越候様子にて、早々歸去。

二三 俠客伝二編執筆は八月二〇日にはじまり、九月一四日迄に第二巻迄出来ている。第五巻の本文脱稿は十一月一〇日。

二四 河内屋茂兵衛の江戸下りは、六月三日大阪出府、同一六日江戸着。同一八日に馬琴を丁子屋平兵衛同道にて訪ねている。ついで二〇日・二四日・七月二日と重ねて来訪、俠客伝の著述刊行のうちあわせ、二編の潤筆内金十両を持参し、七月三日江戸出立、同一三日に大阪へ帰着している。

二五 天保三年は一月に閏がある。

二六 柳川重信

二七 壬辰日記には、九月一〇日以降の宗伯の風邪の水瀉のことが記されている。下女は、四月に旧婢むらが来て手伝い、六月には夏が雇われたが、七月晦日に逐電し、しばらく無人となる。一〇月末より天候不順で家中風邪の為発熱する。

一九〔天保三年〕一〇月一八日

一 壬辰日記〔一〇一三日〕

一、大坂河内や茂兵衛状、十月五日出八日限、昼後飛脚やより届来ル。先月十六日此方より返し候書状之再答也。平妖伝并ニ十二樓・西山物語近々船つみに差越候案内等也。

\* 二七 九月一六日書簡参照。

二 小津桂窓宛書簡〔一〇月一八日〕

一、参考太平記之事云々承知仕候。江戸ニても代金老両老分式朱並通ニ御座候。文化中迄ハ老両式朱ニてよき本御座候ひしか、其節かひ入不申後悔いたし候。大坂河内や茂兵衛方へ申遣し候。是ハ俠客伝引用ニも成候間、船つみにいたし下直ニはたらき差越し候様、申遣し候間、此上御尋被下候ニ不及候。左様御承知可被下候。

〔天理図書館蔵。但、同館稀書目録では天保四年となっているが、天保三年と推定される。〕

三 壬辰日記〔一〇月一八日〕

一、予今朝俠客伝二集三の巻末半冊校合いたし、夫より大坂

河内や茂兵衛へ遣し候書状、并ニ松坂小津新蔵に遣し候返翰、同所殿村佐六に遣し候書状、共ニ三通いづれも長文染筆、……

〔以下次項の注ニ参照。〕

〔補注〕壬辰日記〔十一月二日〕

一、暮六時比飛脚問や京や状配り、大坂河内や茂兵衛状届来ル。右ハ十一月四日出八日限り也。先月十九日・同廿一日是より差出し候書状之返翰也。参考太平記・古今類句も近日船つミにいたし候旨、右直段等巨細ニ申来ル。

二〇〔天保三年〕一〇月二日

一 前項一〇月一八日書簡のこと。

二 壬辰日記〔一〇月一九日〕

一、今朝中川金兵衛昨日の俠客伝二集三の巻末半冊悞写直し持参。……今晚飛脚問や大坂河茂出しの事伝言たのミ遣ス。……

一、夕七時比丁子や平兵衛来ル。……大坂河茂への状八日限にて、今夕出しくれ候様申談しわたし遣ス。并ニいせ松坂小津新蔵に遣し候状一封、是又八日限にて、今夕序ニ飛脚

二〇〔天保三年〕一〇月二日

問やに遣しくれ候様示談、是ハ丁子や用向ニ無之ニ付、脚ちん百文差添早々遣ス。右用向早て帰去。

三 同〔一〇月二日〕

一、夕七時前よりお百を以、瀬戸物町嶋やに遣し、大坂河内や茂兵衛への状一通八日限にて出し、脚ちん差遣し、右請取、印形かよひ帳へ取之、七半時比帰宅。

一、予今朝大坂河茂へ遣候書状一通書之。一昨十九日丁子や幸便ニ頼み、同所同入方へ遣候状中、其節多用にて書もらひし候事有之ニ付、今日追状出スによりて也。

四 天理図書館木村三四吾氏は、この一段を「西荘文庫の馬琴書翰」(十)——近世物之本江戸作者部類考上——に引用されて、馬琴日記に照合して天保二年の書簡と推定されている。(『ビブリア』第一六号 昭和三五年)

五 讃岐高松藩黙老、木村亘(一七七四—一八五六)

壬辰日記〔八月一日〕

一、昼後木村黙老より使札。先便申遣候美少年録三輯の評、并ニ俠客伝再詳、いづれも半紙三四枚ニ認被差越之。請取返翰遣ス。

天保三年八月一六日付、篠斎宛書簡(「曲亭書簡集」所収)